

コロナ禍での学校授業における有効な歌唱指導方法に関する一考察

－「課題研究フィールドワーク」における修士課程学生の学校実習を通して－

上野 正人*・岩崎 靖就**・長谷川 紗耶**

(令和4年1月31日受付；令和4年5月12日受理)

要 旨

本論では、大学院生2名（実習生・ともに筆者）によるA市B小学校での学校実習を通して、コロナ禍での学校教育における有効な歌唱指導方法について考察を行った。マスク着用による歌唱および歌唱指導の困難さは教師と学習者ともに歌唱に関わる内容についての視覚的コミュニケーションの難しさにある。この研究を通して、視覚的なコミュニケーションの困難さを克服するには、指導内容の視覚化の工夫が重要な鍵を握ることが明らかとなった。さらに普段は視覚的に指導可能な内容を、聴覚的な学びとその内容の板書などによる視覚化しての説明の具体化、さらに知覚感受したものを、児童が自ら歌うことを通して自らの技能に結びつけていくという学びのプロセスが非常に有効であることが明らかとなった。また授業では、イメージを喚起するための歌詞の理解や音楽を感受するという指導だけではなく、その表現のためにはソルフェージュや発声の技術などの歌唱技能も必要であることを学習していくことが重要であることも改めて明らかとなった。このことからコロナ禍における歌唱指導の困難さを克服するには、学習内容の可視化による学習目標の明確化や歌唱指導法の工夫とともに、そうした工夫を生み出すことのできるアイデアの源泉となる専門性の高さが重要であることがこの研究から明らかになった。

KEY WORDS

Covid-19 新型コロナウイルス感染症, Schwierigkeiten beim Singen aufgrund des Tragens einer Maske マスク着用による歌唱の困難さ, Gesangsunterricht 歌唱指導, Einfallsreichtum der Lehrmethod 指導法の工夫, Visualisierung 可視化

はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大とともに、生活の様々なところで制約が求められる生活が続いている。学校教育においても同様で、音楽科の授業においても十分な学びが達成されていない現状がある。特に歌唱は飛沫やエアロゾルの発生によるリスクを伴うことから、実施に当たってはマスクを着用することが強く求められている現状がある。文部科学省は令和2年12月10日の「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」¹において、「マスク※²は飛沫拡散防止の効果があるため、原則、着用することとします。」³としている。この通知では、「歌唱時のマスクの着用により息苦しくなるなどのケースでは、十分な距離（最低2m）をとってマスクを外して行うことも考えられますが、地域の感染が拡大しているような場合には、マスクを着用しないで行う合唱活動を一時的に制限するなどの対応も必要です。」⁴とマスクを着用しない場合についても示している。しかし学校現場において、感染拡大を防ぐことを第一に考えた場合には、最もリスクの伴わない形、すなわちマスクを着用しての音楽授業は必須となっている現状がある。しかし一方で、教育機関として長引くコロナ禍の中であっても子供たちの学びを保障する必要がある。

*芸術・体育教育学系 **上越教育大学（修士課程）

¹ 文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」、https://www.mext.go.jp/content/20201210-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf/ 2022年1月13日閲覧

² 同上, p.2

³ 同上

⁴ 同上

こうした現状の解決方法として、教育雑誌やインターネット上には様々な実践報告や学習指導例がなされている。⁵しかし、論文としての報告は、大学の講義における歌唱レッスンでの取り組みの報告や歌唱に伴う飛沫及びエアロゾルの拡散についての実験結果を報告するものを見受けることはできるが⁶、小中学校でのコロナ禍における歌唱の指導事例に基づく実践報告の論文について論述したものは見つけることはできなかった。

執筆現在、変異株による感染の再拡大により世界が再び混迷している。このような状況の中でも、子供たちの学校における学習内容を保障する必要があると考える。そのために特に感染防止の観点から問題視されている音楽科における歌唱指導において子供たちが安心安全でかつ十分な学びを得るためにはどのような指導方法が有効なのか。そのことについて実際の授業場面を把握し考察を繰り返すことで新たな指導方法を見出し提言することは喫緊の課題である。

そこで、筆者は本学の大学院授業「課題研究フィールドワーク」でのゼミ所属実習生の実習において、この問題を解決するための方法について、子供たちの現状の把握と、教師側の困難を感じている事柄の把握とともに、実習生による授業の分析を通して、より充実した学びを得る方法について考察することを本論の目的とした。分析の方法は、まず教師から現状の問題点についてインタビューを行うとともに、実習生が実習生として自ら授業を行い、その中で見えてきた課題について毎回分析を行い、そこから授業への手立てを見出し、次の授業で実践し、その効果について振り返るという方法を取る。その中で現状に最もあった方法を導き出すという方法を取る。

1 現状の歌唱指導における問題点

歌唱指導は、技術と表現の両方の指導が不可欠であるが、特に技術に関しては教師が模範歌唱をすることで子供たちに表現だけでなく歌唱フォームをも感じ取らせることが重要である。しかし、現状では新型コロナウイルス感染防止のために教師、子供ともマスクを着用しているため、教師自らが模範歌唱を持って視覚的に技術を教えることは難しい。また、子供たちもマスクをしている教師から視覚的な技術に関する情報を得ることは難しく、またマスクが妨げとなり、正しい歌唱フォームで歌うということが困難であると想像する。また指導者にとっても子供たちがどのような表情で、どのような歌唱フォームで歌っているかを見ることは難しい。この状況下で、現場ではどのような問題が起きているのか。実習の第1日目に実習校の音楽担当教諭1名にインタビューを行い、その問題点について質問を行った。内容は以下の通りである。

Q1（筆者・上野）：マスクをして歌唱していらっしゃいますけど、先生が感じられている問題点はありますか？

A1（音楽担当教諭）：まず、口の動きが見えないので、きちんと歌っているのかわからないのと、子供たち自身も多分そうだと思うんですけど、マスクがあるからやっぱり息がしづらいみたいで、暑い時とかは歌唱指導を控えたりする時もあります。

Q2：そうですか。なにかそれに対する対処法とかはありますか？

A2：いつもは教室で音楽とかもやるんですけど、こういう広い部屋を使ったりとか、多目的室なんかを使って、電子ピアノとかを使って、ピアノの音がちょっとチープになっちゃうんですけど、そうやって移動して涼しい部屋でやったりとかして、なるべく幅を取ってやったりはするんですけど。

Q3：その時はマスクはしたまま？

A3：マスクはしたままですね。一度マウスシールドをして歌の授業をやったこともあるんですけど、やっぱりここに水滴が溜まるのが気になるみたいで。

このインタビューからもわかるように、マスクを着用しての歌唱指導で最も問題になるのが視覚的に子供たちの様子を確認できないことである。「きちんと歌っているのか」、すなわち正しい発声フォームで歌っているかどうかの確認ができないことが挙げられる。また、子供たち側の問題点として教師が感じていることは、マスクを着用することによって息がしづらいということである。教師はこれに対する対処として、広い部屋に移動して距離を取って歌ったり、あるいは暑い日には歌唱を行わないという方法をとってきた。また、マスクではなくマウスシールドを使ってみ

⁵ インターネット上でよく見るもののとして教育出版株式会社音楽編集部による「平成28年度版 中学音楽・器楽「音楽のおくりもの」『新型コロナウイルス感染症対策における 音楽科の活動内容制限に対応した学習指導例』（https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/important/files/r3chuu_ongaku_shidourei.pdf/2022年1月13日閲覧）やヤマハ（<https://ses.yamaha.com/teaching-support/2022年1月13日閲覧>）など企業によるサイトがある。

⁶ 渡辺明子（2020）を参照。

たが、子供たちはマウスシールドに付着する水滴が気になるようで、うまくいかなかったと答えている。このように、試行錯誤を繰り返しているが、なかなか効果的な方法は見出せていないようであった。

このインタビューの中で対策の一つとして用いられたマウスシールドであるが、マスクよりは開放感もあり、一見良さそうであるが、これに関しては感染対策の観点からは効果が疑問視されている。一般社団法人日本合唱連盟が製作した『合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン』によれば、マウスシールドは「マウスシールドは飛散する飛沫の減少がみられたが、微細なエアロゾルの飛散が確認された」とし、「マウスガードは、検出された微粒子数は少なかったが、可視化実験では微粒子の発生が確認された。その理由は不明なものの、いずれにせよマウスガードには定義・規格が定められておらず、大きさや形状等によって性能が大きく異なる可能性がある。以上から、マウスガードの有効性についてはさらなる検討が必要であり、現時点で感染対策として使用することは勧められない。」⁸としている。一方不織布のマスクでは「不織布マスク、ポリウレタンマスク、マウスガードを使用しての歌唱では、検出された微粒子の数が最も少なかったのは不織布マスクであった。また、ポリウレタンマスクの使用時にも1μm未満の微粒子を少数検出したのみであった。ただし、不織布マスク・ポリウレタンマスクは形状やサイズが様々なものが販売されており、今回使用したマスク以外で同様の結果が出るかは不明である」と検証の結果を報告している。ここからは、現在のところ不織布のマスクを着用して歌うことが、最良であることがわかり、文部科学省も、令和2年12月10日「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について(通知)」において、「マスク※は飛沫拡散防止の効果があるため、原則、着用することとします。」¹⁰としている。この通知では、「歌唱時のマスクの着用により息苦しくなるなどのケースでは、十分な距離(最低2m)をとってマスクを外して行うことも考えられますが、地域の感染が拡大しているような場合には、マスクを着用しないで行う合唱活動を一時的に制限するなどの対応も必要です。」¹¹としているように、やはり感染拡大を防ぐことが第一に考えられることからマスクの着用が原則として求められている。このような通知を踏まえコロナ禍が長引く現状において、実際の授業場面ではマスクを着用しての歌唱の授業が展開されている。

このように、より歌唱にとっての最適解を求めるために色々なものを使用し、実験を繰り返しても、結果的に感染防止の観点からは、不織布マスクが現状では最も飛沫感染拡散防止の効果があることから、推奨されている。

このような歌唱授業にとって不利な状況下にあっても、表現的にも技能的にも充実した歌唱の学びを実施するにはどのような方法が考えられるのだろうか。次章で実習生の実践を通して検討してゆくこととする。

2 実習校A市立B小学校での実習生2名の取り組み

2.1 大学院2年岩崎靖就(筆者)の取り組み

2.1.1 第1日目

① 授業計画

令和3年8月31日(火)

1時限目 5年C組 29名 題材:松井五郎作詞,馬飼野康二作曲《世界が一つになるまで》

4時限目 5年B組 29名 題材:松井五郎作詞,馬飼野康二作曲《世界が一つになるまで》

授業者:岩崎靖就(筆者)

指導目標:歌声の音量を上げ、美しい発声で歌う。

② 指導内容

発声練習では、まず、裏声のハミングで二点Cと一点Cを交互に歌うよう指示し、次に同じハミングで音階に沿って上行と下行を伴う旋律を歌うよう指導を行い、最後にア・イ・エ・オ・ウの母音の順で同じ旋律を歌うよう指導を行った。児童は、口を閉じた状態で発声し歌声を響かせるというハミングが難しいといった様子だった。《世界が一つになるまで》の音取りでは、歌詞で歌わせた後に音程が不安な部分を、アイアイというシラブルに置き換えて歌うよう指導(以降、アイアイ唱と呼ぶ)を行った。児童はアイアイが全員で揃わなかったり、続けて同じ母音で発音していたりと、アイアイ唱に苦戦した様子が見られた。

⁷一般社団法人日本合唱連盟 2021 『合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン』第3版, p.8

⁸同上, p.6

⁹同上

¹⁰前掲書

¹¹同上

③ 授業内容の振り返り（分析と考察）と見えてきた課題

授業の最後に、全員で《世界が一つになるまで》を通して歌ったが、授業の冒頭での歌唱に比べ声量と歌声の改善は見られたものの伸び幅が少なかったと感じた。その主たる要因として、マスクを着用しながらの歌唱指導の困難さが挙げられるのではないかと考えた。授業者の視点からは、児童がマスクを着用していることで口の開き方など正しいフォームで歌えているかどうかの確認ができず、指導に迷いがあったと考えている。一方で、児童からの視点から考えられることは、授業者の口の開き方など正しい歌唱フォームが見えないことによる困難さがあると考えた。

④ 見えてきた課題に対する次回への手立て

1日目の授業では、マスクを着用しながらの歌唱指導の困難さ、特にマスクの着用により口の開き方が見えないことによって起きる正しいフォームを捉えることの困難さが課題として明らかとなった。改善策としては、授業者が口の開き方を、ジェスチャーや絵、写真等で示し、児童がそれを真似する活動が考えられる。そうすることで、正しいフォームが可視化され技能向上に繋がりがやすくなることが期待される。

2.1.2 第2日目

① 授業計画

令和3年9月14日（火）

- | | | | |
|------|------|-----|-------------------------------|
| 1時限目 | 5年C組 | 29名 | 題材：松井五郎作詞，馬飼野康二作曲《世界が一つになるまで》 |
| 3時限目 | 5年B組 | 29名 | 題材：松井五郎作詞，馬飼野康二作曲《世界が一つになるまで》 |
| 5時限目 | 6年A組 | 31名 | 題材：山本瓊子作詞，八木澤教司作曲《あすという日が》 |

授業者：岩崎靖就（筆者）

指導目標：歌声の声量を上げ、副旋律を正しいリズム、正しい音程で、美しい発声で歌う。

② 指導内容

まず、美しい声で明瞭に歌うために必要な3つのポイント（以降、発声の3つのポイントと呼ぶ）の指導を行った。筆者は発声の3つのポイントを、「息継ぎ、発音、口の開き方」と設定し指導を行った。指導の際には、「息、ことば、口」と板書し、加えて口の開き方を黒板に描いた。次に、発声練習を行い、曲のソプラノパートとアルトパートの音取りに取り組んだ。音程やリズムが正しく取れていない箇所は、アイアイ唱と、旋律の音のリズムを手で打つ練習（以降、リズム打ちと呼ぶ）を行わせた。リズム打ちの際には、楽しんで活動に取り組む児童の様子が見られた。最後に、全員で《世界が一つになるまで》の合唱を通して歌った。その際、フレーズを楽譜通りにしっかりと伸ばし歌いきることができていない児童の姿が見受けられた。

③ 授業内容の振り返り（分析と考察）と見えてきた課題

2日目の授業では、1日目の課題として挙げたマスクを着用しながらの歌唱指導における口の開き方が見えないことによる困難さを改善する手立てとして、発声の3つのポイントを板書し、視覚的に理解できるよう指導を行った。その結果、児童は1日目の授業のときに比べ、美しく明瞭な発声で歌えていた。ここから、発声の3つのポイントを板書することで視覚化し行った指導が有効だったことがわかる。しかし、授業の最後に行った合唱では、フレーズを楽譜通りにしっかりと伸ばし歌いきることができていない児童の姿が見受けられた。このことは、今回の発声の3つのポイントの指導のみでは児童の息の持続力の向上にはあまり有効でなかったといえる。

④ 見えてきた課題に対する次回への手立て

2日目の授業では、マスクを着用しながらの歌唱における息継ぎの困難さを、いかに解消させるかということが課題として明らかとなった。改善策としては、息を吸う箇所を増やしたり、アイアイ唱と通常の歌唱とリズム打ちの反復練習を行うことが考えられる。特に、後者は声量を上げる効果があったため、息継ぎの質を高める効果も同時に期待できる。

2.1.3 第3日目

① 授業計画

令和3年9月21日（火）

- | | | | |
|------|--------------------|-----------------------------------|---------------------------------|
| 2時限目 | 4年生（C組 29名，B組 30名） | 題材：保富康午日本語詞，メラー作曲，加賀清孝編曲《ゆかいに歩けば》 | |
| 4時限目 | 3年B組 | 27名 | 題材：秋葉てる代作詞，大熊崇子作曲《おかしなすきなまほう使い》 |

授業者：岩崎靖就（筆者）

指導目標：歌声の声量を上げ、副旋律を正しいリズムと音程で、美しい発声で歌う。

② 指導内容

はじめに、発声の3つのポイントの指導を行った。まず、息を吐ききってから吸うよう指導し実際に行った。児童はこの練習を通して、息継ぎの仕組みに納得した表情を浮かべる姿が見られた。次に、口周りの筋肉をほぐすために、「バマ・バメ・バミ・バモ・バム」と発音する練習を取り入れた。その次に、口をより大きく開くために、「オア・ウイ・ウエ」と発音する練習を取り入れた。そして、発声練習を行った後、曲の音取りを行った。通常の歌唱、アイアイ唱、リズム打ち、リズム打ちしながら歌詞での歌唱の4パターンを繰り返し行った。最後に、曲を1回通して歌った。

③ 授業内容の振り返り（分析と考察）

3日目の授業では、2日目の課題として挙げた、マスクを着用しながらの歌唱指導における息継ぎの困難さを改善する手立てとして、息を吐ききってから吸うように指導を行った。その結果、フレーズを楽譜通りにしっかりと伸ばし歌いきることができるようになっていた。また、児童は授業の最後の歌唱において授業の冒頭に比べてより明瞭で綺麗な発音で歌うことができていた。このことから、用いた2種類の発音練習の効果が表れたことが考えられる。一方で、音楽表現のために必要な声量が不足していたり、音程が揃わない箇所があったりした。この点が今後の課題として挙げられる。

2.1.4 全3回の実習を終えて

全3回の実習を終えて、用いた息継ぎの指導がマスクを着けながらの歌唱における息継ぎの困難さを改善する有効な手立てであることがわかった。しかし、声量や音程の面で課題が見つかった。これは発声の3つのポイントの働きかけが授業の中で適材適所で行えず、児童の歌唱技能の可能性を最大限まで引き出せなかったことが要因として考えられる。改善策としては、曲の音取りを含めた歌唱活動全般において、授業者が児童のつまずきの場面や困難な場面を発見した際、その状況に合わせた指導や働きかけを即座に行うということが必要であると考えられる。

2.2 大学院1年長谷川紗耶（筆者）の取り組み

2.2.1 第1日目

① 授業計画

令和3年8月31日（火）

2時限目 5年A組 29名 題材：みんなで楽しく《世界がひとつになるまで》

5時限目 6年A組 31名 題材：豊かな歌声をひびかせよう《明日という大空》

授業者：長谷川紗耶（筆者）

指導目標：新型コロナウイルス感染症対策のため、授業者も児童もマスクを着用した状態で授業を行った。本実習は、これまでの歌唱場面と異なる環境下での歌唱指導ということもあり、コロナ禍における歌唱指導についての問題点に着目し、全3回の実習の中で改善策を实践および検証することを通して歌唱技術の向上を図ることを目標とした。

② 指導内容

本活動では、まず冒頭で短時間でできる簡単な発声方法を実践し、その後で題材曲の音取り練習を行った。初回の音取り練習だったこともあり、2つのパートのうち、主旋律のパートのみの音取り練習を行った。

③ 授業内容の振り返り（分析と考察）と見えてきた課題

初回となる本活動では、まず児童の歌声を聴いて現状把握をし、その問題点について分析した。その結果、マスクを着用した状態で歌うことによる問題点が三つ挙げられた。まず一つ目は、児童の表情や口の開き具合が見えないことである。この原因は、当然のことながらマスクで顔の3分の2が隠れてしまうことにある。通常のように、児童の口の開け方や表情を活動の中で確認しながら進めることができない中で、どのようにして口の開け方についての指導を行うかが課題となった。二つ目は、マスクで声がかもって言葉が不明瞭になってしまうことである。この原因は、マスクを着用することによって口の動きが制限されてしまうことにあると考えられる。したがって、マスクを着用した状態でも、正確で明瞭に言葉を発音できるようにするための指導を行うことが課題となった。三つ目は、息の支えができておらず、ある一定の音量以上の声が出せていないことである。またそれに加えて、途中で息が絶え絶えになってしまい、関係のないところで小刻みにプレスする児童が多く、フレーズを一息で歌いきることに苦戦する様子が見受けられた。この原因は、マスクというフィルターを通すことによって息が吸いづらくなってしまうことにあると考えられる。したがって、マスクを着用した状態であってもたつぷりと息を吸って流すということに意識を向けることが課題となった。

④ 見えてきた課題に対する次回への手立て

一つ目の口の開け方については、以下のような指導を行う。

(1) 授業者がマスクを着用したままで「口を縦に開けた状態」と「口が横に広がっている状態」

2種類の声を出し、響きの違いを感じ取る。

(2) 児童が実際に声を出し、響きの違いを確かめる。

二つ目の正確で明瞭な言葉の発音については、以下のような指導を行う。

マスクを着用した状態で口をしっかりと動かして言葉をしっかりと発音する練習を行う。

「バマ・バメ・バミ・バモ・バム」

三つ目の呼吸の改善については、「息を吸って」という声掛けを中心に、息をたっぷりと吸うことに意識を向けるようにする。

2.2.2 第2日目

① 授業計画

令和3年9月14日(火)

2時限目 4年C組 29名 題材：旋律の特徴を感じ取ろう《ゆかいに歩けば》

4時限目 6年B組 31名 題材：豊かな歌声をひびかせよう《明日という大空》

授業者：長谷川紗耶(筆者)

指導目標：新型コロナウイルス感染症対策のため、授業者も児童もマスクを着用した状態で授業を行った。本実習は、これまでの歌唱場面と異なる環境下での歌唱指導ということもあり、コロナ禍における歌唱指導についての問題点に着目し、全3回の実習の中で改善策を実践および検証することを通して歌唱技術の向上を図ることを目標とした。

② 指導内容

前回の授業で挙げられた課題は以下の三点である。

①口の開け方②正確で明瞭な言葉の発音③呼吸の改善

本活動では、これらの三つの課題を改善するための指導を行った。

まず、一つ目の口の開け方については、以下のような指導を行った。

(1) 授業者がマスクを着用したままで「口を縦に開けた状態」と「口が横に広がっている状態」

2種類の声を出し、響きの違いを感じ取る。

授業者が「口を縦に開けた状態(1回目)」と「口が横に広がっている状態(2回目)」2種類の声を出し、「1回目と2回目どちらの声が歌う声だと思いますか」と問いかけると、全員が「2回目」と答えた。このことから、児童は2種類の声の響きの違いを感じ取ることができたと判断した。

(2) 児童が実際に声を出し、響きの違いを確かめる。

この活動では、まず授業者が口の形を板書して図形として視覚化させた。

その図形を見た児童からは、「長い」「縦」「高い」という反応があった。更に、「O」の口の形が縦に開いた状態であることを伝え、積極的に声を出して試す姿がみられた。

二つ目の正確で明瞭な言葉の発音については、以下のような指導を行った。

マスクを着用した状態で口をしっかりと動かして言葉をしっかりと発音する練習を行う。

「バマ・バメ・バミ・バモ・バム」

児童は、最初は苦戦している様子だったが繰り返すうちに呼吸のタイミングや、言葉を発するときの子音のタイミングなどのコツをつかみ、懸命に口を動かして練習していた。

三つ目の呼吸の改善については、主に「息を吸って」という声掛けを行い、息をたっぷりと吸うことに意識を向けるようにした。声掛けをすることにより、特にサビ前の盛り上がりは効果が感じられた。

③ 授業内容の振り返り(分析と考察)と見えてきた課題

○口の開け方について

授業者が2種類の口の開け方で実際に発声することで、児童が口の開け方によって声の響きが変わることを感じるとともに、響きのある声のイメージをつかむことにつながったと考えられる。また、口の形を板書すると、授業者が実際に口を見せる時よりもうなずくような反応があり、口の形を視覚的なイメージで伝えることは効果があったと感じられた。

○正確で明瞭な言葉の発音について

繰り返すうちに呼吸のタイミングや、言葉を発するときの子音のタイミングなどのコツをつかんだ様子が感じられ

た。また、最初は言葉がはっきりと伝わるようにするために取り入れた発音練習であったが、子音のスピード感を素早くさせることにも効果がありそれによって支えのある声に繋がったと考えられる。一方で、特に音楽がp（ピアノ）になるところなどでは、まだ発音が弱くなってしまうところがあり、完全に改善されたとは言えない。発音練習で行ったことと歌う活動がいかなる時も別々のものにならないようにすることが課題として挙げられた。

○呼吸の改善について

マスクというフィルターを通すと、息を十分に吸ったつもりになっても実はしっかりと吸えていない、ということが課題となっていた。このことは、ある一定以上の声が出せていないこと、また音楽的なフレーズを無視した場所でのプレスが多数見受けられ、一息で歌いきることに苦戦する児童の様子から判断できる。この問題に関しては、その都度吸うことに意識を向けるような声掛けが非常に重要であるように感じた。一方で、吸うことだけに意識を向けさせてしまうと、まだ吐き切らないうちに吸うことになってしまい、逆に肩や胸が上がって余計な力が入ってしまう様子も見受けられた。

したがって、呼吸の改善については、「吸うこと」ばかりに意識を向けさせるのではなく、「吸って吐くこと」がセットで適切な呼吸に繋がるということを活動の中で伝えていく必要性を感じた。

④ 見えてきた課題に対する次回への手立て

本活動では、口の開け方の指導により、響きのある声については一定の効果が得られたが、正確で明瞭な言葉の発音についての指導はまだ不十分なところが課題として挙げられた。したがって、その改善をするために、発音練習で行ったことを歌う活動の中に実践的に取り入れられるような指導を次の活動で行いたい。そのためにまずは、発音練習をとりいれるタイミングを工夫し、活動の導入だけでなく、歌う活動の中に組み込むことで常時意識できる状態をつくる。また、本活動で発音練習が子音のスピード感を素早くさせることに効果があり、結果として支えのある声に繋がったことから、手拍子を伴ったリズム練習を取り入れながら、子音を素早く発音する感覚を曲の中でも実践できるような活動を行うことを考えている。

2.2.3 第3日目

① 授業計画

令和3年9月21日（火）

- | | | | |
|------|------|-----|--------------------------|
| 1時限目 | 5年C組 | 29名 | 題材：みんなで楽しく《世界がひとつになるまで》 |
| 3時限目 | 5年A組 | 29名 | 題材：みんなで楽しく《世界がひとつになるまで》 |
| 5時限目 | 6年A組 | 31名 | 題材：豊かな歌声をひびかせよう《明日という大空》 |

授業者：長谷川紗耶（筆者）

指導目標：新型コロナウイルス感染症対策のため、授業者も児童もマスクを着用した状態で授業を行った。本実習は、これまでの歌唱場面と異なる環境下での歌唱指導ということもあり、コロナ禍における歌唱指導についての問題点に着目し、全3回の実習の中で改善策を実践および検証することを通して歌唱技術の向上を図ることを目標とした。

② 指導内容

本活動の冒頭では、響きのある声で歌うための口の開け方や、「吸うこと」ばかりに意識を向けるのではなく、「吸って吐くこと」がセットで適切な呼吸に繋がるという説明をし、前回の活動内容を振り返った。

また前回の活動では、発音練習で行ったことが歌う活動の中で活かされていなかったということが課題として挙げられた。したがって、本活動では発音練習で行ったことを歌う活動の中に実践的に取り入れるために以下のような指導を行った。

まずは、発音練習を活動の導入だけでなく、歌う活動の中に適宜組み込むことで常時、正確で明瞭な発音の状態を思い出して実践できるように工夫をした。歌う活動の中で何度も発音を意識するように声掛けを行い、歌の活動の合間に発音練習を小刻みにはさんだ。また、前回の活動で発音練習が子音のスピード感を素早くさせることに効果があり、結果として支えのある声に繋がったことから、手拍子を伴ったリズム練習を取り入れながら、子音を素早く発音する感覚を曲の中でも実践できるような活動を行った。最初は、手の動きと声の立ち上がりのタイミングにズレがあり、なかなかまとまらなかったが繰り返し練習することで、児童は周りの音が聞けるようになり、音楽の縦が揃うようになった。また、発声も改善され、支えのある安定した歌声になり、全体的には迫力のある歌唱へと変化したように感じた。

③ 授業内容の振り返り（分析と考察）

本活動では、手拍子を伴ったリズム練習を取り入れながら、子音を素早く発音する感覚を曲の中でも実践できるような活動を行った。最初は言葉がはっきりと伝わるようにするために取り入れた発音練習であったが、呼吸のタイミ

ングや、言葉を発するときの子音のタイミングを掴むということの他にも、子音のスピード感を素早くさせることにも有効であり、結果として支えのある声に繋がるという効果が得られることが分かった。

2.2.4 全3回の実習を終えて

全3回の実習を通し、マスクを着用した状態で歌うことによる三つの問題点を改善するための指導を展開してきたが、口の開き方や正確で明瞭な発音、そして呼吸法それぞれの改善策として行ったことはマスクを外した状態での歌唱時においても常に意識しておくべき重要事項であることに気付いた。したがって、コロナ禍であってもなくても本実習での実践は一定の効果が得られるのではないかと考えている。今後も、常時活動の中で継続して行うことで、児童の歌唱技術を向上させていきたい。

3 実習生2名による授業実践の分析と考察

本実習では、指導目標をコロナ禍における歌唱指導についての問題点の洗い出しと分析、その改善策の立案と実践、およびその検証におき、そのことを通してコロナ禍での充実した歌唱指導の方法について考察することを目標とした。

コロナ禍における歌唱授業の困難さについて授業者である実習生2名は、教師、児童ともにマスクを着用していることによって「マスクの着用により口の開き方が見えないことによって起きる正しいフォームを捉えることの困難さ」（岩崎）、「児童の表情や口の開き具合が見えない（中略）児童の口の開け方や表情を活動の中で確認しながら進めることができない」（長谷川）という視覚的なコミュニケーションの困難さを挙げている。それは、担当教師も述べている。この解決方法として、2人ともに初回の授業で感じた歌唱の課題を「息継ぎ、発音、口の開き方」（岩崎）、「口の開け方、正確で明瞭な言葉の発音、呼吸の改善」（長谷川）と絞り、ジェスチャーや黒板への板書などより視覚的な面に着目した指導を行った。長谷川は第2日目において、授業冒頭にマスクを着用することによって歌唱にどのような難しさが生まれるかを説明し、授業の学習目標として「口、ことば、息」と板書した。さらに2種類の声を聴かせ、響きの違いを感じ取らせた上で、その違いが口の開け方にあることを口の形を板書することで図形として視覚化させた。この指導によって長谷川は、「児童からは「長い」「縦」「高い」という反応があった。更に、「O」の口の形が縦に開いた状態であることを伝え、積極的に声を出して試す姿がみられた」（長谷川）とその反応について述べている。ここでの指導は、まず聴覚的に感じさせ、その理由を板書することで視覚的に印象付け、さらに実際に児童に歌わせることで体験させ、体感させるという手順で指導を行っている。これにより、児童は、学習の目標を知覚感受し、体験を通して学習することができると明らかなった。

また、表現指導の中では、明瞭な発音や正確な音程、リズムを獲得するために、通常の歌唱活動に加えて「アイアイ唱」や「リズム打ちをしながらの歌唱」を適宜用いて児童の技能の向上に努めている。この方法は、上野（筆者）が常日頃から大学の授業や出前講座による小中学校での指導で実践し、その効果を実感している指導法であるが、この方法による指導によって児童の演奏能力が高まってきたことを2人の実習生も実感していることがこの実践の報告から明らかとなった。

4 まとめ

本論では、大学院生2名による実習を通して、コロナ禍での学校教育における有効な歌唱指導方法について考察を行った。マスク着用による歌唱および歌唱指導の困難さはまさに教師と学習者ともに歌唱に関わる内容についての視覚的コミュニケーションの難しさにある。この研究を通して、視覚的なコミュニケーションの困難さを克服するには、指導内容の視覚化の工夫が重要な鍵を握ることが明らかとなった。さらに普段は視覚的に指導可能な内容を、聴覚的な学びとその内容の板書などによる視覚化しての説明の具体化、さらに知覚感受したものを、児童が自ら歌うことを通して自らの技能に結びつけていくという学びのプロセスが非常に有効であることが明らかとなった。また授業では、イメージを喚起するための歌詞の理解や音楽を感受するという指導だけではなく、その表現のためにはソルフェージュや発声の技術などの歌唱技能も必要であることを学習していくことが重要であることが改めて明らかとなった。それは自分たちの思いや意図が十分に反映された演奏表現をするためには発声法などの歌唱の技能が必要であり、それは有機的に絡み合いながら高まっていくものだからである。¹² そのための練習方法は、学習者が取り組み

¹² 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』第1章2（3）p.7を参照。

やすいシンプルでかつポイントを抑えたものである必要があると筆者は考えている。それは変化に富んだ授業を可能とし、技能の向上が学習者の達成感につながり、自習やグループ活動時にも容易に取り入れることができるからであり、主体的な学習に結びつくと考えるからである。

この実践と検証を通して長谷川は「口の開き方や正確で明瞭な発音、そして呼吸法それぞれの改善策として行ったことはマスクを外した状態での歌唱時においても常に意識しておくべき重要事項であることに気付いた」と述べている。このように、コロナ禍における歌唱指導の困難さを克服するには、学習内容の可視化による学習目標の明確化や歌唱指導法の工夫とともに、そうした工夫を生み出すことのできるアイデアの源泉となる専門性の高さが重要であることがこの研究から明らかになった。

引用文献

- 一般社団法人日本合唱連盟（2021）『合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン』第3版
 文部科学省（2020）「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」、https://www.mext.go.jp/content/20201210-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf/ 2022年1月13日閲覧
 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』東洋館出版社

参考文献

- 教育出版株式会社音楽編集部（2020）「平成28年度版 中学音楽・器楽「音楽のおくりもの」『新型コロナウイルス感染症対策における 音楽科の活動内容制限に対応した学習指導例』（https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/important/files/r3chuu_ongaku_shidourei.pdf/2022年1月13日閲覧）
 ヤマハ株式会社及び株式会社ヤマハミュージックジャパン『新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮した音楽授業のアイデア』（<https://ses.yamaha.com/teaching-support/2022年1月13日閲覧>）
 渡辺明子（2020）「コロナ禍の歌唱における対面授業対策への模索－歌唱時の飛沫の可視化実験データより－」『芸術研究12－玉川大学芸術学部研究紀要－』玉川大学

Eine Studie zu effektiven Methoden der Gesangspädagogik im Schulunterricht in der Corona-Katastrophe

– Durch praxisnahe Schulausbildung von Masterstudierenden in “Problem Research Fieldwork” –

Masato UENO* · Yasunari IWASAKI** · Saya HASEGAWA**

ABSTRAKT

In diesem Beitrag haben wir effektive Gesangsunterrichtsmethoden in der Schulbildung in der Corona-Katastrophe durch die Schulausbildung an der B-Grundschule in A-Stadt durch zwei Doktoranden (sowohl Auszubildende als auch die Autorin) betrachtet. Die Schwierigkeit des Singens und des Gesangsunterrichts mit Maske liegt in der Schwierigkeit der visuellen Kommunikation über die Inhalte rund ums Singen für Lehrende und Lernende. Durch diese Forschung wurde deutlich, dass Einfallsreichtum bei der Visualisierung der Lehrinhalte der Schlüssel zur Überwindung der Schwierigkeiten der visuellen Kommunikation ist. Zudem werden die visuell vermittelbaren Inhalte mit den eigenen Fähigkeiten verknüpft durch auditives Lernen, Visualisierung der Inhalte an einer Tafel und Wahrnehmungsempfindungen durch Singen der Kinder selbst. Es wurde deutlich, dass der Lernprozess des Weitergehens sehr groß war. Wirksam. Außerdem lernt man im Unterricht, nicht nur die Texte zu verstehen, ein Bild hervorzurufen und die Musik zu fühlen, sondern auch zu lernen, dass für den Ausdruck gesangliche Fähigkeiten wie Solfege und stimmliche Fähigkeiten notwendig sind, was wieder einmal deutlich wurde.

Um die Schwierigkeit des Gesangsunterrichts in der Corona-Katastrophe zu überwinden, werden wir daraus die Lernziele verdeutlichen, indem wir die Lerninhalte visualisieren und Gesangsunterrichtsmethoden sowie die Expertise erarbeiten, die die Ideenquelle sein wird, die solchen Einfallsreichtum hervorbringen kann. Diese Studie hat gezeigt, dass die Höhe wichtig ist.

* Art and Physical Studies Education ** Joetsu University of Education (Master's Program)